伝統技術継承者による
デジタルアーカイブ化の実例と課題

-「竹筬（たけおさ）」という機道具の復元製作を例に-

日本織物文化研究会　金城 弥生
岐阜女子大学　井上 透

CC BY

研究の概要

- デジタル機器やソフトウェアの発達により誰もがアーキビストになり得る環境にある現在、職人や技術者たちが自分の「技」を記録し、発信することは珍しいことではない

- アーキビストなど「第三者による」記録や発信ではなく、技術者自らがその「技」を記録し口伝と共に後世へ残す重要性とその手法の研究

- 技術者が個人で撮影・発信した貴重な映像や媒体を「アーカイブ」として誰がどのような方法で後世へ繋いでいくか、またその可能性について、積極的且つ組織的に議論されるべき課題

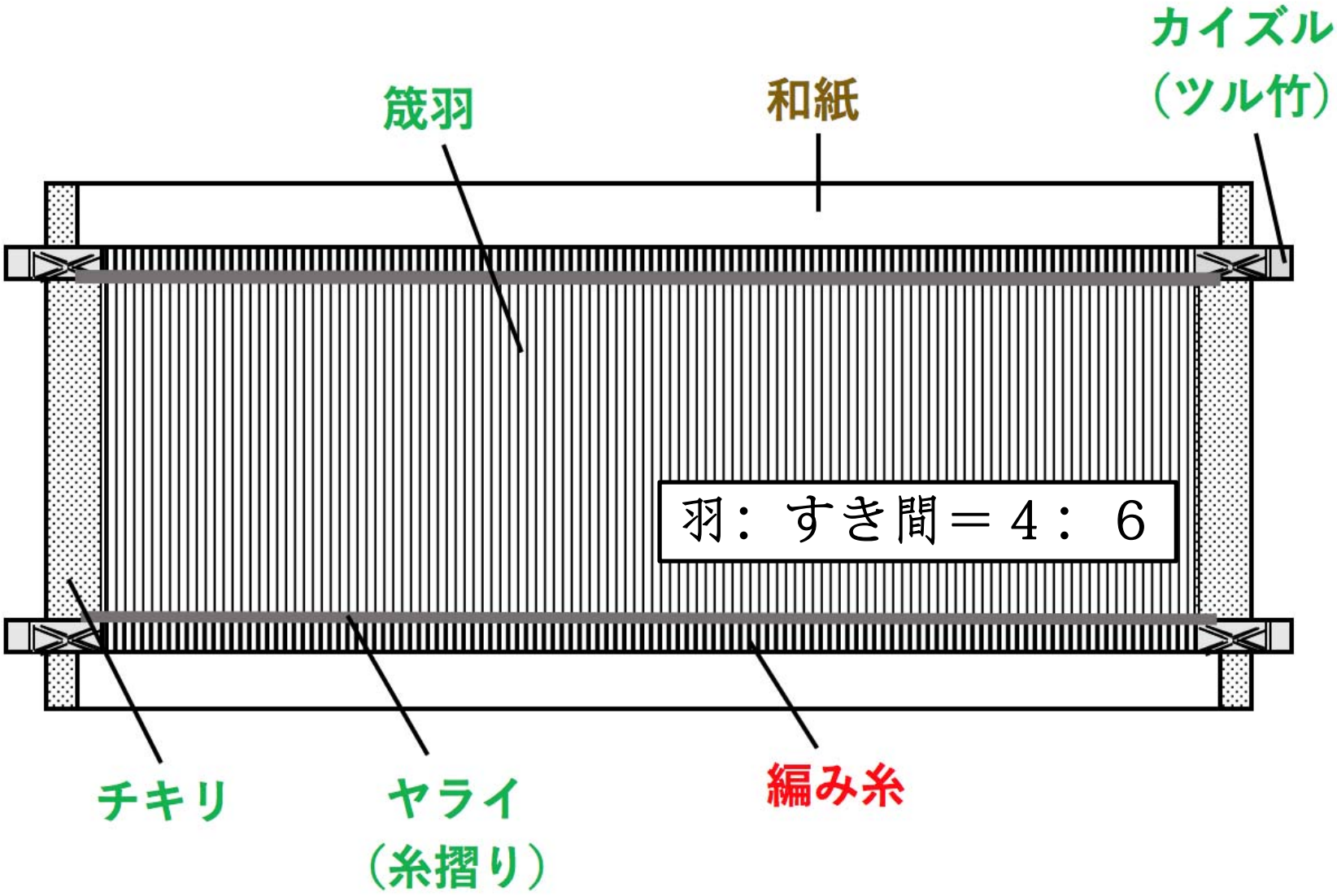
竹筬の役割と現状について

復元製作した下機（天秤腰機）と竹筬

竹筬の形状と役割

復元製作した竹筬　19羽/cm間、全長約51cm（織り幅48cm）

竹筬の構成部材と名称



日本の竹筬製作の現状

- 最後の竹筬職人と言われた京都市西陣の北岡高一氏が**1996**年に亡くなり、更に**2003**年に岐阜県の筬羽の製造会社が営業を停止したことにより、竹筬の入手が困難となった。

- 2003年当時はまだ高齢の竹筬職人が全国に数人いたが、筬羽が入手できないことにより、修理の仕事しかできなくなった。

- 2018年現在は竹筬復元製作を目指すグループがいくつかあり、それぞれ活動をしているが、素材の確保や技術継承の問題などがあり、一般的には入手が困難な状況が続いている。

復元製作へ向けた調査の実施

竹筬復元製作に向けた調査の実施

- 文献調査

  →止戈枢要・機織彙編「筬拵え方」など

- 実測調査

  →全国20以上の博物館等にて1000点以上実施

- 聞き取り調査

  →全国の筬職人または元竹筬職人へ実施

北岡家調査（京都市西陣）

・北岡綾子氏へ調査依頼

・2001～03年にかけて３回訪問

・江戸時代から残る道具の撮影

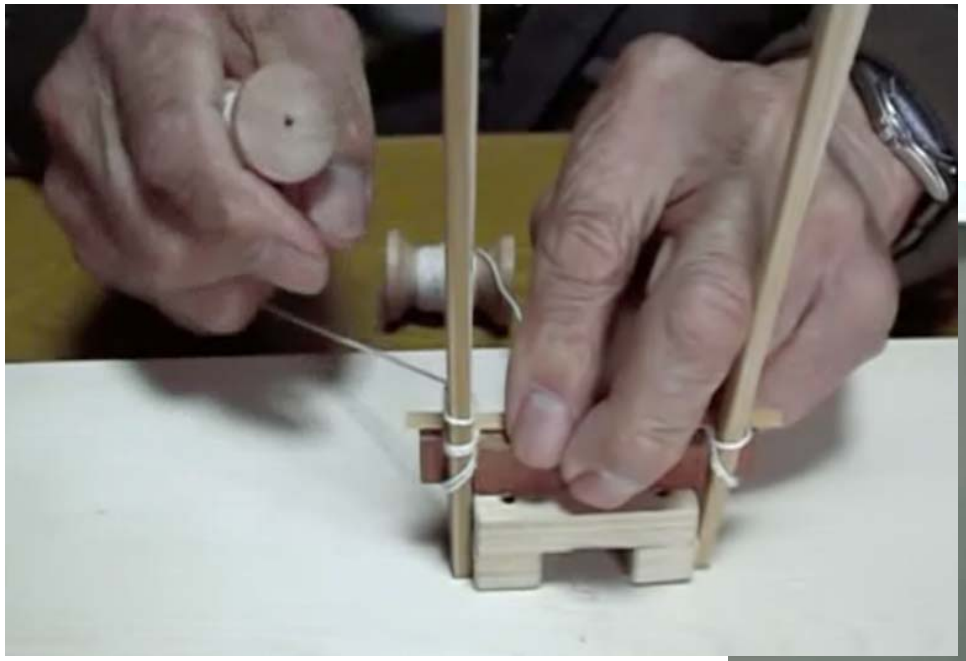
・長屋を利用して編み糸作りを担当した綾子氏より当時の様子の聞き取りを実施

写真：北岡家で製作実演をする北岡高一氏
（日本織物文化研究会　前田亮氏　提供）

上野一雄氏への調査（熊本県山鹿市）

- 2010年に2回訪問
- 久留米絣の織元から紹介された人づてに知り合う
- 50年前まで久留米絣用の竹筬を作っていたが、その後木工所を経営してきた
- 上野氏の方言が解らないことがあったため、2回目の訪問では山鹿市立博物館学芸員に同行いただき理解を深めた

上野一雄氏と奥様



上野氏やご家族への聞き取り調査の実施が
「職人や技術に対するデジタルアーカイブ研究」
を本格的に始めるきっかけとなった

復元製作過程の記録とアーカイブ化

竹筬製作の記録